



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3280 号 2016.9.27 発行

「すべての命と尊厳守ろう」障害者ら300人行進

朝日新聞 2016年9月26日



脳性マヒなどの障害がある東京都のは、同じ障害のある女性との間に2人分も介助が必要なのに、なぜ子どもを別や偏見にさらされた実体験を追悼

山田正人さん(32)は大阪府東大阪市から参加した。23歳の時の交通事故が原因で、手足に障害がある。掲げた言葉は「私たちの存在を否定しないで」。同じ作業所の仲間たちと考えた

さいたま市の上野美佐穂さん(42)は脊髄性進行性筋萎縮症。「障害があっても普通に人生を楽しんでいる。助け合って生きる手段を持っている。自分の人生をかけてその姿を見せていく」と思いを語った

知的障害のある大曾根清美さん(44)は、知人が書いた言葉に花や菓子の絵を添えた。「命や人のつながりがあって平和ならば、あんな事件は起こらない」という思いを込めた



大阪からアピール行進に参加喜恵(あきえ)さん(2)



を掲げた精神障害(統合失調症)と向からDPI日本会議の事務局で働く鷲原(さぎは)さん(34)。視覚障害のある男性を誘導しながら、



た身体障害がある渡部貞(3)は福島県から参加した。「事件は差別がある社会の縮図です」。帽子には参加できない仲間がつくった花を飾った

東京都の今村登さん(52)は胸に「NO MORE 優生思想」、背中に「あの日 殺されたのは 俺たちだ」というメッセージを掲げた。「事件を風化させず活動していきたい」

相模原市の障害者施設で刺殺された入所者19人の月命日にあたる26日、障害者や支援者ら約300人が東京都の中心街でアピール行進を行った。掲げた紙には「すべての命はみんな平等」「障害者を

猿渡達明さん(42)の子どもがいる。「自つくるのか」という差集会で語った

加した大橋グレース(8)。多発性硬化症な病と向き合いながら、生活している

害のある東京都の上菌和隆さん(64)は、白杖(はくじょう)を手に行進した。背中には「幸せすぎる障害者」と書かれたカード

き合いながら)由佳さんとともに歩い

美さん(6

殺すな」といったそれぞれの思いを記入。障害の有無で分け隔てられることのない社会の実現を訴えた。

東京都千代田区の日比谷公園から東京駅近くまで、「すべての命と尊厳を守ろう」などと声を合わせて1時間ほど行進した。実行委員会の構成団体の一つ、「DPI日本会議」の佐藤聡事務局長（49）は「事件の容疑者が語ったとされる『障害者はいなくなればいい』という価値観に、障害当事者がきちんと反対の意思を表明することが必要だ。障害がある人とない人がともに生きる社会をつくるのが、差別や偏見をなくすことにつながる」と強調した。

参加した菊地敏明さん（69）は中学生の時にプールの飛び込みで頸髄（けいずい）を損傷し、手足などにまひが残る。「障害があるなしにかかわらず、誰でも自分らしい人生を生きる権利がある」と語った。

アピール行進に先立ち国会内で開いた追悼集会では、呼びかけ人らが「いらぬ命は一つもない。人格や個性が尊重される活動をしていく」「障害が重くても地域で暮らせる社会になってほしい」などと訴えた。白い布で覆われたテーブルの上には、19のろうソクと花が添えられた。

相模原殺傷事件2か月で集会「分け隔てない社会を」 NHK ニュース 2016年9月26日



相模原市の知的障害者施設で起きた殺傷事件から26日で2か月です。東京・千代田区では、障害のある人やその家族たちが追悼集会を開き、障害の有る無しによって分け隔てられることのない社会の実現を呼びかけました。

障害のある人や家族で作る11の団体の呼びかけで東京・千代田区で開かれた集会には、およそ300人が参加しました。

会場には、亡くなった19人、一人一人にそれぞれの人生があったことを伝えようと種類が異なる花とキャンドルが19組並べられました。

はじめに全員で黙とうをささげたあと、障害のある人たちが事件を受けた今の思いを語りました。

このうち知的障害のある女性は「障害者を人間として扱ってこなかったのは容疑者だけではないのではないか。障害が重い仲間も施設ではなく地域で生きていける社会にしたい」と呼びかけました。

また、脳性まひの障害がある東京大学の熊谷晋一郎准教授は「事件を起こしたのは障害のある人など少数派を排除してきたこの社会であり、社会を支える私たち自身にもその責任の一端があると感じている」と述べました。

集会では、措置入院の強化への抗議のほか障害の有る無しによって分け隔てられることなく、障害者が地域で暮らせるような社会の実現を目指すとする宣言を採択しました。参加した人たちは、このあと「多様性の尊重」という意味を込めて持ち寄った花とメッセージボードを掲げて都内を行進しました。

「命の尊厳をもっと大切に」

全国から障害者が参加した行進に参加した人たちからは事件への怒りや悲しみに加え障害者の命の尊厳をもっと大切にしてほしいといった声が多く聞かれました。

脳性まひがある京都市の香田晴子さん（54）は「この事件は国民1人1人の問題。障害者を社会から排除するな」と書かれたメッセージボードを掲げながら行進しました。

事件について香田さんは「障害者が嫌だと容疑者が話していると聞いてショックを受けました。障害者差別解消法はできましたが、やっぱり人の気持ちはなかなか変わらないと感じました」と話していました。

また下半身が不自由な大阪・東大阪市の地村貴士さん（45）は「今回亡くなった人の実名が公表されなかったがそれが本当の優しさなのか問いたいです。私たちは障害があっても同じ人間でどういう事件に巻き込まれて人生を終えたのかがわからないと報われません。社会に私たちの存在を訴えたいです」と話していました。

行進の先頭の横断幕には「生まれ出た生命にいらぬものなどない手足が、腕がなくともことばを發せられなくともひん曲がった身体でもどんな身体をもとうともいのちである」などと19人を追悼するメッセージが添えられています。

行進にはこのことばを書いた脳性まひがある福島県田村市の渡部貞美さんも（63）参加しました。

行進に参加できなかった同じ施設の仲間が作った花をあしらった帽子をかぶった渡部さんは、「本当に衝撃的な事件で根深い差別意識が消えていないと感じました。命が最も大切です」と話していました。

渡部貞美さんのメッセージ

福島県田村市から参加した脳性まひがある渡部貞美さん（63）は、犠牲になった19人に向けて「十九人の御霊へ」と題する追悼のことばを書き、行進の先頭の横断幕にこのことばが添えられました。

横断幕には「命が消えた心に千本の矢がささる気持が宇宙でバラバラに飛び散る肉体と魂が行き場をなくす生れ出た生命にいらぬものなどない手足が、腕がなくともことばを發せられなくともひん曲がった身体でもどんな身体をもとうともいのちである魂と心は生きている仲間の中に」と書かれています。

やまゆり園建て替え 構想策定費など6500万円 県、補正予算案を提出

東京新聞 2016年9月27日

県は二十六日、開会中の県議会定例会に、入所者の殺傷事件が起きた県立知的障害者施設「津久井やまゆり園」の建て替えに向けた基本構想策定費など六千五百万円の本年度一般会計補正予算案を提出した。（原昌志）

基本構想策定費は千五百万円。年内に大まかな方向性をまとめ、年度内の策定を目指す。新たな再生のイメージを描き、これを元に来年度に基本設計などに入る。

合わせて、障害者との共生社会実現への取り組みを進めるため、五千万円を計上した。新聞各紙を活用した広報を行うほか、十二月の障害者週間を機に啓発機運を盛り上げる呼び掛けを行う。

ツイッターやフェイスブックといった会員制交流サイト（SNS）を活用し、広がりを作る。来年度には、芸能人やスポーツ選手らの協力を得て若者を巻き込んだ「共生フェスタ」を開催することとし、その準備を始める。黒岩祐治知事は提案説明で「ともに生きる社会かながわを目指してきた県の取り組みは微動だにしない、との断固たる思いをメッセージとして、全国に強烈に発信したい」と述べた。

椅子など使って不審者撃退 さいたま市、保育施設職員向け防犯研修

産経新聞 2016年9月27日

相模原市緑区の障害者施設「津久井やまゆり園」で入居者19人が刺殺された事件から2カ月が過ぎた26日、さいたま市は保育施設職員向けの防犯研修を浦和コミュニティセンター（同市浦和区）で実施し、約330人が参加した。

県警生活安全企画課による講演では、来訪者出入り口の限定▽避難経路の確保▽来訪者に対する声かけの徹底ーなど被害を未然に防ぐための具体的なチェック項目を説明。不審者が侵入しようとした場合の対処法を、ドラマ仕立てのDVDを使って指導した。

その後、浦和署員が不審者の動きを抑えるための刺又（さすまた）の使い方や、刺又が

ない場合、椅子や遊具などを使って不審者を撃退する方法を実演。参加者の一部は実際に刺叉を持ち、一人または複数での対応を学んだ。

同市は28日にも、障害者向けのサービス事業者などを対象とした地域の防犯に関する会議を、岩槻駅東口コミュニティセンター（同市岩槻区）で開催する。

【相模原殺傷事件】「福祉施設の防犯対策強化に違和感」 施設の立場で橋会長が提言

福祉新聞 2016年09月27日 編集部



橋文也・日本知的障害者福祉協会会長

神奈川県立の障害者支援施設「津久井やまゆり園」（相模原市）で7月26日に発生した殺傷事件は、19人の死亡者、27人の負傷者を出した。容疑者が重度障害者の安楽死を容認する考えを持っていたことは社会へ波紋を広げており、福祉施設の防犯体制の見直しに向けた議論も進んでいる。事件に対する思いや今後の団体としての活動について、障害者施設の立場から日本知的障害者福祉協会の橋文也会長に聞いた。

同じ人としての視点を

一戦後最大規模の殺人事件が障害者施設で起きてしまいました。

協会の会長として、事件の2日後にやまゆり園を訪れて、献花してきましたが、いまだに信じられません。被害に遭われた利用者のことを思うと強い憤りを覚えます。

また、地域に開かれた障害者施設へ、というこれまでの流れに逆行するような事件が起きたことはとても残念です。

一事件を受け、厚生労働省は今年度の第2次補正予算で、障害者施設での防犯対策を強化する方針です。

最初聞いた時は身構えました。福祉施設にも最低限の防犯対策はもちろん必要です。しかし、過度に防犯カメラや塀を設置する必要は本当にあるのでしょうか。

近年、障害者施設は地域との垣根をなくす取り組みを進めてきました。4年後には東京オリンピックもあります。スポーツや文化芸術の分野以外でも、障害者が今より社会参加する時代になるでしょう。

そんな目指すべき共生社会から後退しないことを望みます。施設で知らない人を見掛けたら犯罪者かもしれないと疑うような流れは避けたい。心はオープンであってほしいと思います。

一容疑者が元施設職員だったことも衝撃でした。

今回の事件は特異な事例だと思います。容疑者の生育歴を知らないのでは何とも言えませんが、障害者の命を軽視する発言は、真っ向から否定します。

施設職員なら皆分かっていると思いますが、どんなに重い障害がある人でも日々喜びや悲しみを感じていて、意思を持っています。

ただ、障害があっても意思を表示することが得意でないだけです。それでも考えをくみ取り、なるべく本人の意向を実現するお手伝いをするのに施設職員の専門性があると思います。

容疑者にも声なき声に耳を傾けてほしかったですね。意思表示が乏しい人だから生きる価値がないわけでは断じてありません。

一今後、障害者施設はどういう方向性を目指すべきですか。

行政も含め関係者が一丸となり、障害者への理解と障害福祉の啓発を促進すべきだと思います。ハードではなく、ソフトに力を入れるべきです。

事件を起こしたのは人であり、障害者への差別や偏見が助長されない命の大切さへの啓発が必要だと思います。犯罪を生まない地域づくりです。

小中学校では啓発の授業が行われていますが、高校や大学では考える機会は少ない。最近では障害者雇用も進んできましたが、それでも社会で障害者に触れる機会はまだまだです。

現在、協会の会員は6100施設で、全国どの地域にもあるわけです。会員施設がそれぞれ、町内会の活動を行うなど地域にどんどん入り込んで、障害者への理解を広めてほしいと思います。

偏見や差別をなくす特効薬はありません。大規模な広報ではなく、地道に関係者が取り組んでいかなければならないと思います。

障害があってもなくても、同じ人としてお互いに助け合うという視点が大事だと伝えてほしいと思っています。

認知症患者への対処法DVDに 姫路のNPO法人 神戸新聞 2016年9月27日

障害者や高齢者らの在宅福祉サービスを行うNPO法人「はなのいえ」（兵庫県姫路市青山北3）は、認知症患者らが行方不明になった場合の対処法などをまとめたDVDを作成した。徘徊（はいかい）による事故防止のほか、認知症の理解を深めてもらう啓発活動に活用する。



同法人は姫路市の助成を受けて、認知症患者に対応する模擬訓練を初めて行い、その様子をDVDに収録した。

行方不明になった認知症患者を捜す模擬訓練に取り組む参加者ら＝姫路市三条町

訓練には市内外から福祉施設の職員ら約35人が参加。驚かせたり急がせたりせず、普段通り対応するなど、認知症患者に接するコツを学んだ。

「どうされましたか?」。続く模擬訓練では、捜索担当の参加者が患者役の職員を見つけて声を掛けた。所持品や会話などで得た情報を本部に素早く連絡し、保護するまでの流れを体験した。

こうした訓練の機会は少ないといい、太子町の福祉施設で働く男性（45）は「接し方のポイントなど初めて知ることも多く、大変勉強になった」。同法人の内海正子理事長（51）は「地域ぐるみで認知症患者を支える仕組みを作りたい」と話した。

市によると、市内の認知症患者は推計約2万人。市は警察や協力企業と連携し、患者が行方不明になった際、写真や特徴などの情報を共有するシステムの構築を進めている。（末永陽子）

返礼品に希少品種のぶどうなど 東村山市ふるさと納税 産経新聞 2016年9月27日

東村山市は26日、同市の魅力発信や市内産業の活性化を目指し、ふるさと納税への取り組みを大幅に見直すと発表した。29日以降の寄付に「地元産品を返礼品として贈り、東村山を全国にアピールし、税収増を目指す」（渡部尚市長）。また、寄付金の使途に国立ハンセン病療養所・多磨全生園（ぜんしょうえん）（同市青葉町）を取り巻く「人権の森」の保全を盛り込むなど独自色を出す。

29日午後1時以降、インターネットのポータルサイト「ふるさとチョイス」（<http://www.furusato-tax.jp/>）ではクレジットカードによる寄付も受け付ける。

返礼品は1万円以上の寄付が対象で、寄付額に応じて4コースを設定。ぶどう「アウローラ」、地酒「屋守（おくのかみ）」、障害者作業所が製造協力したレトルトパック入りぜんざい、市シルバー人材センターの「暮らしのお手伝い」などをそろえた。

アウローラは5万円以上の寄付が対象。全国で20軒ほどの農家しか栽培していない希少品種で、都心の百貨店で1房数万円の高値がつくこともあるという。

一方、寄付金の使途には「人権の森」のほかに、希少動植物が住む水辺環境の保全、歴史遺産や伝統文化の保護や振興といった同市ならではのものを追加

全国下回る支援学校卒業生の就職率 改善へ協議

神戸新聞 2016年9月26日

県特別支援学校認定資格について意見を交わしたパネリスト＝県立阪神特別支援学校



特別支援学校卒業生の就労を促進する「特別支援学校キャリア教育・就職支援研究協議会」が26日、兵庫県西宮市田近野町、県立阪神特別支援学校で開かれた。企業関係者や保護者、教員ら約130人が参加し、意見交換した。

県教育委員会によると、2015年3月に県内の特別支援学校を卒業した生徒の就職率は18・3%。全国平均の28・8%を大きく下回る。県は特別支援学校就職支援推進会議を設置し、授業改善に取り組むとともに、同協議会で事例発表や課題の協議を重ねる。

協議会では専門家や企業関係者、教員を交えたパネル討議があった。

県教委の担当者が、来年度創設する県特別支援学校認定資格となる「喫茶サービス」「ビルクリーニング」の検定について説明した。

議論中、兵庫ビルメンテナンス協会の鈴木光理事は「中小企業の中にも、障害者の採用意欲はある。検定に関する情報などを積極的に発信してほしい」と注文を付けた。（篠原拓真）

妹の障害と家族 上映...来月2日・亀有

読売新聞 2016年09月27日

映画のチラシを手に「ぜひ見てほしい」と話す赤崎さん（葛飾区で）

◆葛飾・赤崎さん監督「多様性認めて」

知的障害などのある妹と家族の生活を描いたドキュメンタリー映画「ちづる」の上映会が来月2日、葛飾区亀有で開かれる。2011年に公開されたこの映画は、区内の知的障害者施設で働く赤崎正和さん（28）が監督を務めたものだ。今年7月、相模原市の障害者施設での46人殺傷事件が社会に衝撃を与えたばかりだが、赤崎さんは「障害への偏見を取り払い、多様性を認めてほしい」としている。

赤崎さんは、大学で映像技術を学び、卒業制作として、3年生だった2009年秋から1年がかりで「ちづる」を撮影した。主人公は、知的障害と自閉症を持つ妹、千鶴さん（26）。千鶴さん、母、赤崎さんの3人が時に仲良く、時にぶつかり合いながら、家族として成長する様子を79分の作品にまとめた。映画は各地の映画館で上映もされた。

赤崎さんは小学生の頃から、千鶴さんについて友人に話すのをためらってきた。話せば、「かわいそうだね」と過度に気遣われたり、からかわれたり。「世間に障害を理解してほしい」という思いで撮り始めたが、撮影を続けるうち、赤崎さん自身も、今まで千鶴さんを「障害者」として敬遠していたことに気づいたという。

作品では、カメラを回す赤崎さんに千鶴さんがほほ笑みかける様子や、母が子育ての悩みを打ち明ける様子などが克明に描かれている。撮影で、家族の絆は急速に深まったといい、赤崎さんは「千鶴の表情は柔らかくなったし、母の内面も知ることができた」と話す。

将来は映像関係の仕事に進みたいと思っていた赤崎さんだが、映画を撮影しているうちに福祉関係の職に就きたいと思うようになり、卒業後、同区東堀切にある知的障害者の介護施設「東堀切くすのき園」に就職した。そこで、入所者の家族会が中心となり、昨年、区内で上映会が開かれた。

映画を見た人からは「障害者のいる家族も普通の家庭と変わらないのがよくわかった」と好評だった。このため、今年、改めて映画を上映することになった。赤崎さんは「福祉に携わる人間として、相模原の事件には怒りを感じる。映像を見てもらえば、障害も一つの個性だと多くの人に感じてもらえるはず」と話す。



上映会は10月2日午後1～4時、亀有地区センターで。定員100人（先着順）。入場無料。問い合わせは区教委生涯学習課（03・5654・8476）。

旭川荘が知的障害者「カレッジ」 岡山に大学形式で17年4月開設

山陽新聞 2016年9月27日

「カレッジ旭川荘」の開設場所となる旭川荘厚生専門学院吉井川キャンパス



社会福祉法人旭川荘（岡山市北区祇園）は来年4月、知的・発達障害のある18歳以上向けに、一般教養や就労に向けた専門課程を学ぶ「カレッジ旭川荘」（仮称）を旭川荘厚生専門学院吉井川キャンパス（同市東区西大寺浜）に開設する。大学形式の福祉サービス事業で、4年間のカリキュラムを用意。厚生専門学院の講義にも出席し、福祉について学ぶ学生と交流を図るほか、

スポーツや文化活動といったキャンパスライフも楽しむ。

日本が2014年に批准した国連の障害者権利条約、今年4月に施行された障害者差別解消法を踏まえ、知的・発達障害者の高等教育や生涯教育の機会を確保する狙い。知的障害のある人が就労に向け、特別支援学校で2年間の専門課程を学ぶケースはあるが、厚生労働省によると、一般教養を含む4年間のカリキュラムと、他の学校と交流する形式は珍しい。

カレッジは前半の2年間で社会性を高める自立訓練事業に充て、基礎学力やコミュニケーション能力を高める教養課程とする。3年次以降は就労移行支援事業として、企業見学や職場実習、マナー研修といった専門課程を設ける。資格取得の学習や研究論文、スポーツ、文化活動などもあり、大学生活に近いスタイルにする。

知的障害や発達障害のある18歳以上が対象で、定員は1学年10人。面接試験で選考する。入学金や学費は原則不要だが、調理実習などの実費は徴収する。

旭川荘は今年4月に開設準備室を設け、具体的なカリキュラムを検討している。末光茂理事長は「障害者の就労の場は増えつつあるが、もっと学びたいと願う人も多い。障害者自らが生きる力を身に付け、未来を切り開ける場となるよう後押ししたい」と話す。

問い合わせは、10月2日までは旭川荘（086—275—0131）、同3日以降は開設準備室（086—944—6920）。

左ハンドルの福祉車両で乗降安全 京都の会社が開発・販売

京都新聞 2016年9月26日

京都の自動車販売・整備会社が左ハンドルの福祉車両を開発し、近く販売に乗り出す。運転席が歩道側にあるため、安全に乗り降りできるのが特徴で、身体障害者らの利用を見込む。病気の後遺症により、自身も不自由な生活を経験したことがある経営者は「障害があってもカーライフを楽しんでほしい」とエールを送る。

新車・中古車を取り扱うワイズコーポレーション（京都市右京区）が受注生産する。同社は左ハンドル化した国産車を、公道で安全走行できる国の公認車両として海外に輸出していた実績を持つ。

これまでに介護施設から、送迎車を左ハンドルにできないかとの相談を受けたことがある。また、乗用車を愛用する車いすバスケットの選手からも「車道に面した右ハンドルは乗り降りが危険」との声を聞き、一定の需要があると判断した。

市販の軽自動車を左ハンドルの福祉車両として改良し、公認車両の認可を受ける。シャフトやエアコンなど内部機構を入れ替えるとともに、回転・昇降式の座席を採用して乗り降りの負担を軽減。障害の状態に応じた改良も可能という。

山田基久社長（42）は7年前、首の椎骨動脈解離を発症し、2カ月間入院。左半身にまひが残ったものの、日常生活に支障がないまでに回復した。「大好きな車に乗れなかったあの経験がなければ、今回の事業化にここまで本気にはならなかった」と振り返る。

山田社長は「身障者が安全に外出できるようにして自立支援につなげたい。車の問題に限らず、障害のある方にとって不便なことは多いので、そこに健常者が目を向ける一助にもなれば」と話している。

社説：首相所信表明 「未来」の実像はどこに 北海道新聞 2016年9月27日
臨時国会がきのう始まった。

安倍晋三首相は所信表明演説で「アベノミクスの加速」「1億総活躍」「地球儀を俯瞰（ふかん）する外交」を柱に据えた。いずれも政権が、かねて掲げてきた目標だ。

新たな看板で目を引くのではなく、成果と失敗を検証して具体策を掘り下げるなら理解できる。

だが「未来」「挑戦」の言葉が躍る一方、財源の裏付けや長期的展望は十分に示されなかった。

課題の根底には、経済・社会の将来像を描ききれない国民の不安がある。景気対策や政権浮揚のスローガンではなく、生活基盤に目を向けたかじ取りが求められる。

アベノミクスをめぐっては、これまでの結果について納得のいく総括を聞くことはできなかった。

首相は雇用改善や賃金上昇を強調したが、個人消費は回復せず、デフレ脱却はおぼつかない。従来の金融政策や財政出動で将来不安は払拭（ふっしょく）できないという教訓だ。

なのに首相はアベノミクスを「加速」という。必要なのは抜本的な方向転換ではないのか。

首相が1億総活躍の政策を「未来への投資」と強調したのは、その問いに答える意味なのだろう。

介護、保育の受け皿整備加速、同一労働同一賃金の実現、給付型の奨学金創設など、いずれも実現すべきものだ。だが高齢化に伴う医療費増大などを見据えた社会保障の全体像は、描けていない。

財源は、消費税増税を先送りする中で「アベノミクスの果実も活（い）かし、優先順位を付けながら社会保障を充実する」という。しかしアベノミクス自体が既に限界に達している。見直しが不可避だ。

外交ではロシアとの北方領土問題を解決し「平和条約がない異常な状態に終止符を打つ」と強い意欲を見せた。首脳会談の積み重ねで手応えをつかんだのだろうか。

気になるのは最近、この問題をめぐって政府周辺から観測気球のような情報発信が目立つことだ。ロシア側に予断を与えれば交渉を阻害する。慎重対応を望みたい。

首相は演説の最後を憲法改定への意欲で締めくくった。決めるのは国民とした上で、提案するのは「私たち国会議員の責任だ」と強調。「思考停止に陥ってはならない」と、護憲論をけん制した。

だが現行憲法への評価は多くの国民が共有する。占領下で制定されたから変えねばならないという発想こそ、硬直してはいないか。

今後の改憲論議が、数の論理だけで性急に進められるような事態は、避けなければならない。

